

第一部

事故の報告と考察

I. 岩手医科大学山岳部の冬期活動

盛岡周辺の山々は年による差はあるものの概ね12月中旬から翌年4月上旬がスキー登山の適期である。本学は2月から進級試験が始まるため、冬期の登山は12月中旬から1月中旬に限られこの時期に山中泊の山行を定例化したかった。平成8、9、10年の12月は十分な積雪のある田代岱山荘に宿泊し乳頭山に登っていたがここしばらくは途絶えており、今回は復活させたいと考えていた。

II. 今回の登山

1. 登山の計画

今回の冬期山行の候補として大深山荘泊源太ヶ岳、田代岱山荘泊乳頭山が挙げられた。リーダー・武田と山岳部長・利部教授の相談の結果、2002年1月13、14日に大深山荘泊で源太ヶ岳への山行と決まった。山行の計画を堀口教授に伝えたところ参加の意向であった。

計画では、2002年1月13日松川温泉から入山し、源太ヶ岳山頂を通過して大深山荘（無人小屋）に泊まり、翌日同じコースを引き返す予定であったが、天候次第ではルート途上に雪洞泊まりとすると考えていた。

源太ヶ岳と大深山荘について

源太ヶ岳は標高1545m。八幡平南部の一角を形作り大深岳に連なるなだらかな陵は一面の樹氷原が広がる。裾野の松川温泉から入山するのが一般的で下部の美しいブナ林は高度を増すに従ってダケカバ、オオシラビソに変化し、頂上直下東面には無木立の斜面が広がる。植生の美しさと上部のスキーに適した広大な斜面、さらに稜線上の樹氷などスキー登山の魅力に満ちた山である。しかし頂上付近は強風に見舞われ、南斜面は急な崖となっており過去には死亡事故もある。

大深岳から脊梁沿いに高度差約100m北に下ったところに大深山荘がある。老朽化した小さな山小屋であるが薪ストーブがあり快適に過ごせる。大深山荘は源太ヶ岳や大深岳方面からであると冬期の視界不良時には大変見つけにくい。従って大深山荘泊まりを計画した時点で山荘が見つけられない場合あるいは山荘に到達できない場合は雪洞泊になることは周知の事項であった。また、冬期に大深山荘を見つけるには源太ヶ岳に登り稜線上を大深岳方面に進み途中からコンパスを頼りに北に進路を変える方法が山荘を見つける確率が最も高いと考えられる。

雪洞について

我々は冬期八幡平等を縦走する場合は通常雪洞ないし山小屋泊まりである。山岳部自体の活動が低調だったため最近の雪洞泊回数は多くないが、1997年3月と2001年1月八幡平縦走で利用している。2000年2月と3月に堀口教授と黒瀬ほかが行った和賀岳登山でも利用した。

豊富な積雪がある北東北の山では適切な場所が選べれば雪洞は快適であり、また不時の際、疲労

凍死を防ぐために最も安全な避難場所と考えられ、雪洞技術は雪山入山に必須としていた。

2. 行動記録

パーティは解剖学第一講座教授・堀口正治、病理学第一講座講師・黒瀬顕、武田三十郎（医学部2年）、村瀬邦崇（医学部3年）の4名となった。出発前日の1月12日堀口教授は13日に日帰りにすることに変更した。利部教授は都合により参加を取り消した。

堀口教授はテレマークスキーで、他の3名は山スキーでの行動となった。

主な装備： シャベル2本、無線機2台、各自携帯電話（ドコモ：堀口、黒瀬、PHS：武田、au：村瀬）、ツェルト（ゴアテックス2人用、雪洞の入り口を塞ぐため）、食料、コンロ、寝袋。



地図1. 国土地理院発行2万5千分の1地形図（松川温泉）より。パーティの行動を青線で、雪崩発生場所をXで記す。

1月13日

8:00 パーティ4名は車で松川温泉峽雲荘着。松川温泉付近でも風がかなり強く、山頂方面は雲の流れが極めて速く、風速は20mはあると思われた。この時点で、今回の山行では大深山荘に行くことは無理と考え源太ヶ岳周辺に雪洞を掘る計画に変更していたが、入山後に天候回復した場合は大深山荘行きも視野に入れていた。雪崩ひもは装着せず。

8:40 峽雲荘出発。峽雲荘から暫く車道を行き、丸森川沿いに入山。このあとほぼ冬の源太ヶ岳の通常のルートに登った。13:00に源太ヶ岳山頂付近着。源太ヶ岳山頂は立つことが困難なほど

の強風のため、源太ヶ岳山頂下10m位で引き返した。この時点でこの付近の適当な場所に雪洞を掘ることとした。

雪洞掘り

雪洞の場所として源太ヶ岳東面斜面の南側の尾根寄りを選んだ。源太ヶ岳東面は南北250mほどにわたる広い斜面である。斜面中央部は斜度はやや急であるが30m程度で緩斜面に移行している。斜面中央部では時期によって異なるが50～100mほどの間に雪庇が発達ししばしば雪庇崩落が生じる（冬期には小規模なものが殆ど。大抵はデブリは50m程度崩落して止まっている。時に100m程下方にデブリを見ることもあるが冬期には大規模なものは稀と推測される）。そこで、雪庇から離れ斜面中央部から離れた、斜面南（斜面に向かって左）の尾根寄り（尾根に寄るほど傾斜が緩くなる）の斜面の上部を雪洞場所を選んだ。視界は悪い時で150m程であり、雪煙が舞って視界良好とは言えないが、斜面中央部の雪庇は確認できた。雪面はスキーをはいてふくらはぎ程度まで潜ったが比較的締まっている印象であり、いわゆる風成雪と考えられた。我々4名が漸次移動しても雪面が動く気配は無かった。雪洞に選んだ位置は約10数mで緩斜面に移行している場所であった。

荷物をおろし、堀口教授、武田、黒瀬はスキーを脱いでそれらは雪洞地点の約5m南に立てておいた。村瀬はスキーで転倒して他の3人より10m下方で止まった。14：10頃、雪洞掘削開始。武田が先頭（最も斜面側）で雪洞を掘り、堀口教授と黒瀬は武田の後方に位置し武田の掘った雪塊を斜面に落としていた。斜面に放った雪塊は斜面を5～10m程度滑る状況であった。この間村瀬は閉脚登行で3人の位置に近づいてきていた。

雪崩発生

雪洞を掘り始めて5分ほど経った頃、おおよそ14：15頃、突然何の前兆もなく雪洞を含む斜面が雪崩れた。雪崩発生時、武田、黒瀬、堀口教授の3名は約2m四方内におり、村瀬はザックを背負ったまま3名と同じ高さに戻ってきており3名の左方約5mの位置にいた。村瀬は雪洞掘削部（雪洞入り口の屋根になる部分）から約3m上部に亀裂が走りそこから下の雪面が動いたのを目撃していた。流速は速くはなかった。一旦速度が緩み止まるかと思われたがその後再び速度を増し走路を曲げてさらに下方に流れた。途中武田と黒瀬は木におつかった。この間18秒ほどと思われた。

雪崩停止後

雪崩が止まった時点で黒瀬、村瀬、武田の3名の無事はすぐに確認できたが堀口教授の姿は見えなかった。雪崩が止まった時点（黒瀬、武田、村瀬の無事が確認できた時点）では斜面上部まで視界良好で雪崩の全容（雪崩発生部位からデブリ先端まで）が見渡せ、二種類の雪崩（後記）が生じたことがすぐに推測された。またこの時点で全ての雪崩は停止していた。武田は両下肢埋没、黒瀬は下肢の一部埋没、村瀬はザックを背負ったまま仰向けの状態で全く埋没していなかった。4名のザック（村瀬はザックを背負ったまま）、7本のストック（全8本）、1本のシャベル（全2本）、3本のスキー（全8本）は雪面に出ていた。またもう1本のシャベルは一部が雪面に出ていた。武田は木と衝突して右大腿部を強打（後の診察で木と衝突した直達外力による右大腿四頭筋腱断裂、右大腿四頭筋肉離れと判明）したため動くことができなかった。雪崩停止と同時に黒瀬と村瀬が堀口教授の捜索に当たった。まず雪崩の発生地点から我々3名の流された地点の延長線上に堀口教授の手がかりがないか探したが見つからなかった。次いでストック（ブラックダイヤモンド製）を二本つなぎ合わせてゾンデ棒にしゾンデによる捜索に切り替えた。雪崩発生時武田、黒瀬および堀口

教授は約2m四方内にいたので、武田、黒瀬が停止していた地点付近に堀口教授が埋没している可能性が高いと判断し、最も上部に流されていた武田の位置付近から漸次下部に向かってゾンデ搜索を開始した。我々の雪崩の幅に水平移動し、その後約50cm下がって水平移動する事を繰り返した。デブリ上に足跡が残ったのでそれを目印に水平方向に移動した後、漸次一段ずつ下方に移動した。ゾンデを刺す幅は約50センチとした。

14:48、歩行不能の武田が黒瀬の携帯電話（ドコモ）にて110番通報し、事故の概要を伝え救助要請した。この間も、黒瀬、村瀬は上部からの二次雪崩に注意しつつ搜索を継続した。PHSとauは圏外であった。源太ヶ岳頂上付近および上部東斜面でドコモの携帯電話が使用できることは以前から分かっていた。

警察から負傷者をヘリで救出する旨携帯電話に連絡があり、武田をヘリで搬送してくれるよう伝えたが強風が続いていた。16:30頃ヘリの音が聞こえたのでヘリのホバリングを考慮して少しでも風の弱い斜面下方に武田を移動した。ヘリが何度かトライしたが強風のため吊り上げを断念するとヘリから携帯電話に連絡があった。

17:00頃、県警より本日の救助は打ち切りとの電話連絡があった。こちらからは3名は十分翌日まで山中で待機出来る旨、未だ堀口教授は発見されない旨、翌日は武田を搬送してもらいたい旨、翌日の搜索では多数のゾンデ棒が必要な旨を伝えた。

当日夜

日没を過ぎ、1384標高点の約100m南に雪洞掘りにかかった。雪洞完成後、19:26、峡雲荘に待機している利部山岳部長に電話連絡し、堀口先生は依然として不明であること、武田が足を負傷しているものの生命の危険は無く3名の緊急の救助は必要無いこと、および現在位置を伝えた。利部部長からは明朝6時に搜索隊が現地に到着する旨連絡があった。

同夜中、強風があり、2時間おきに雪洞入り口の除雪が必要であった。

1月14日の救助と搜索

午前4時頃より風が止んだ。夜明けとともに快晴、無風であった。雪洞付近では風に飛ばされた雪が約50cm新たに堆積していた。雪崩現場では5cm程の新たな堆積量であった。

6:20頃救助隊と合流。八幡平山岳遭難救助隊隊長・高橋時夫氏に雪崩の概要と、堀口教授が埋没している可能性が高い堆積区を伝えた。その後救助隊の一部は武田の搬送、一部は堀口教授の搜索に当たって下さった。村瀬は元気であったがスキーが埋没していたため救助隊からの要請でヘリで搬送することとした。

7:00救助隊による堀口教授の搜索が始まった。

7:17（時刻は岩手日報による）、武田、黒瀬、村瀬が雪崩で流された位置の約15~23m下流のデブリの中、深さ約1mの位置に堀口教授が搜索隊のゾンデ棒搜索によって発見された。黒瀬も掘ったが、既に死亡していた。7:30（同）武田がヘリで搬送された。8:12（同）村瀬もヘリで搬送された。8:47（同）堀口教授の遺体がヘリで搬送された。その後、黒瀬は堀口教授のザックとストックを持って搜索隊とともに下山開始し、10:40（同）松川温泉峡雲荘に到着。県警からの簡単な事情聴取の後、大学に帰った。